

【資料紹介】

島根県立大田高校所蔵の作家書簡類について

武田信明・三宅倫太郎

（島根大学法文学部・島根県立大田高校図書館司書）

摘 要

本稿は、2020年9月島根県立大田高校（島根県大田市大田町大田イ568）図書館書庫で発見された、37名39点に及ぶ作家や文化人の書簡・生原稿資料を紹介するものである。武田信明（島根大学法文学部）と、資料の発見者であり調査にも携わった三宅倫太郎（大田高校図書館司書）が共同で報告する。

キーワード：島根県立大田高校 作家書簡 作家原稿

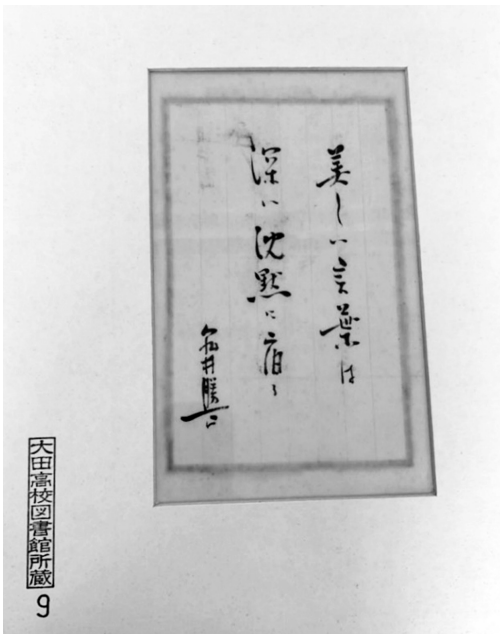
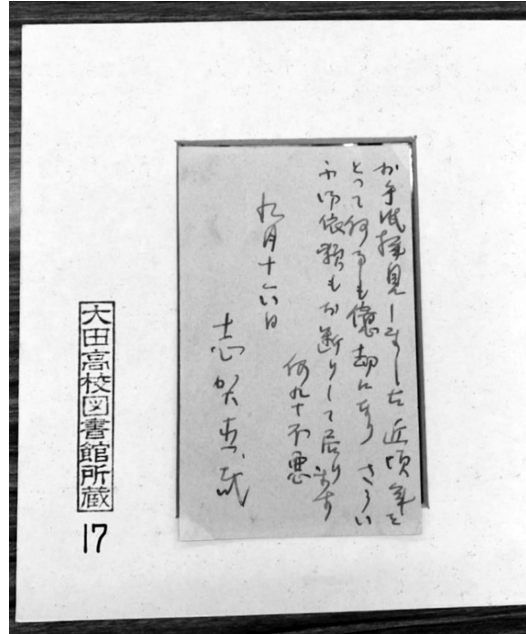
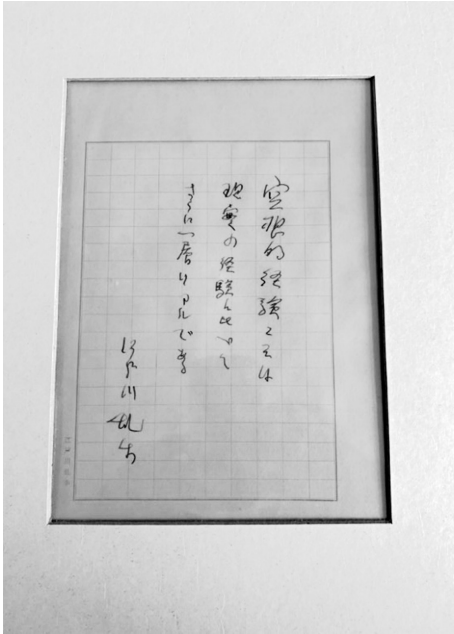
1. 「大田高校蔵作家書簡」資料概要

本稿で紹介する大田高校資料を便宜的に「大田高校蔵作家書簡」と呼ぶこととする。この大半は、1961年（昭和36年）10月18～22日に開催された大田高校文化祭での企画「現代作家筆蹟展」に展示されたものである。大田高校図書部の高校生の出展依頼に応じて寄せられたものである。出展者は、志賀直哉・江戸川乱歩・佐藤春夫・村野四郎などの文学者が中心であるが、亀井勝一郎・金子大栄・鈴木大拙などの評論家・宗教家・思想家なども含まれており、幅広い陣容になっている。また寄せられた自筆の形式も、葉書・手紙・色紙・生原稿など多様である。一部近親者によって書かれたものも存在するが、ほとんどは作家本人の自筆である。

次頁にその一部の写真を掲載した。写真1「江戸川乱歩・原稿」、写真2「志賀直哉・葉書」、写真3「亀井勝一郎・便箋」、写真4「佐藤春夫・原稿」である。写真で示したように、資料はすべて両側から透明フィルムで挟まれたうえ、ボール紙製の枠で固定されている。また「大田高校図書館所蔵」という印が捺され、作家名の五十音順に1番から36番までナンバリングされている（「西村滋」は番外となっている）。ただし第21番「須知徳平」と第34番「山本有三」は各2点が存在するため総数は39点である。詳細は後掲の別表「大田高校蔵作家書簡一覧表」で示すとして、ここでまず「大田高校蔵作家書簡」の作家名を番号とともに示しておく。

1番 阿部知二	2番 石川達三	3番 石坂洋次郎	4番 伊藤桂一
5番 犬養道子	6番 永六輔	7番 江戸川乱歩	8番 大野晋
9番 亀井勝一郎	10番 金子大栄	11番 邱永漢	12番 金達寿
13番 源氏鶏太	14番 駒田信二	15番 佐藤春夫	16番 里見弴
17番 志賀直哉	18番 獅子文六	19番 洪沢秀雄	20番 鈴木大拙
21番 須知徳平	22番 瀬沼茂樹	23番 曾野綾子	24番 武田繁太郎

- | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|
| 25番 田辺聖子 | 26番 徳川夢声 | 27番 平岩弓枝 | 28番 本多秋五 |
| 29番 三宅艶子 | 30番 村野四郎 | 31番 村山リウ | 32番 山崎豊子 |
| 33番 山本周五郎 | 34番 山本有三 | 35番 和田傳 | 36番 渡辺一夫 |
| 番外 西村滋 | | | |



写真上段左「江戸川乱歩」便箋
写真下段左「亀井勝一郎」便箋

写真上段右「志賀直哉」葉書
写真下段右「佐藤春夫」原稿用紙

これらの書簡・原稿は、どのようにして集まり、どのように大田高校に保管されていたのであろうか。『創立四十周年記念録』『大田高等学校六十年史』『大田高校図書館報』などの大田高校資料、ならびに三宅倫太郎による関係者への聞き取り調査によって、所蔵資料に関するおおよその経緯があきらかとなってきた。それを時系列に記しておく。

1) まず1961年は大田高校創立40周年であり、それを機に「現代作家筆蹟展」が企画された。齊藤義心(国語教諭・故人)などの指導の下、図書部の高校生が分担して依頼の書簡を送り、展示の準備にあたった。作家の住所に関しては、当時毎年刊行されていた『文芸年鑑』に記載されているものを参照したと推定できる^(注1)。どのぐらいの作家に依頼文を送付したのかという全体像、どのような基準で依頼先を選定したのか、依頼文の具体的な文面はどのようなものであったのか。これらについては残念ながら記録が残されていない。ただ作家の返信文などから「現在活躍中の文学者・文化人に直筆の文章を送ってもらい、それを文化祭で展示する」という趣旨であったと類推される。

『創立四十周年記念録』には、この企画展に関して〈四十周年記念文化祭にふさわしい企画として早くより準備に着手し、左の通り各大家からの色紙、原稿、返信をいたゞき、会場を飾ることができた〉と記され、具体的な作家名が記されている。以下のとおりである^(注2)。

【1961年「現代作家筆蹟展」作家一覧】

阿部知二、犬養道子、江戸川乱歩、金子大榮、亀井勝一郎、川端康成、金素雲、金田一京助、金達寿、駒田信二、佐藤春夫、里見淳、志賀直哉、鈴木大拙、武田繁太郎、田宮虎彦、邱永漢、平岩弓枝、三宅艶子、村野四郎、山本周五郎、山本裕義^(注3)、山本有三

以上23名が記されている。「大田高校蔵作家書簡」と比較するなら、川端康成、金素雲、金田一京助、田宮虎彦、山本祐義ら下線を付した5名の作家は、現存する資料中に名前が見当たらない。つまり、これらの5名の書簡類は、展示されたものの、その後何らかの理由で散逸してしまったということである。

2) 一方、「大田高校蔵作家書簡」の37名の顔ぶれを見るなら、1961年の「現代作家筆蹟展」で展示された23名以外の作家の名前が確認できる。石川達三、石坂洋次郎など19名である。これらに関しては、1961年の作家への依頼を嚆矢として、その後も何度か同様の「現代作家筆蹟展」が企画されたのだと推定できる。ただしそれらの記録は断片的にしか残っていない。まず作家から送られてきた葉書、封書に貼られた切手の消印、あるいは書簡に書き込まれた日付を見るなら、1961年(昭和36年)以外の以下のような日付が確認できる。「石坂洋次郎 昭和41年7月1日」「大野晋 昭和40年9月24日」「源氏鶏太 昭和46年9月23日」「本多秋五 1965年9月22日」「山崎豊子 昭和43年7月3日」「和田傳 昭和40年9月27日」である。西暦か元号かは書簡の日付のままとしている。

これを見るに、少なくとも1965年(昭和40年)、1966年(昭和41年)、1968年(昭和43年)、

1971年(昭和46年)の4回、「現代作家筆蹟展」もしくはそれに準じる展覧会が企画されていたと推定できるのである。その裏付けとなるのが『大田高校図書館報』や『瓶陵新聞』である。『大田高校図書館報』第63号(昭和61年12月)、第65号(昭和63年3月)には、文化祭において「現代作家筆蹟展」が実施されたことが記載されている。また、とりわけ注目すべきは、大田高校新聞部が発行する『瓶陵新聞』第133号(平成元年12月25日)に掲載された、「本校の宝物」と題された詳細な記事である。以下に記事の一部を引用する。

図書館には、貴重な「宝物」がある。それは、佐藤春夫、阿部知二、亀井勝一郎といった文学史に名の残る諸大家が、「大田高校生のために」特に書いて下さった、貴重な、というよりも掛け替えのない色紙や原稿のたぐいである。(中略)これらの「宝物」は、昭和六十一年から六十三年に至る三回の学園祭において「現代作家筆蹟展」と銘打って公開展示したもので、三年、二年の諸君は見覚えのある人も多いと思う。(中略)それは、いまから、約三十年前、本校創立四十周年記念文化祭の折のこと。当時の図書委員であった先輩の方々が、諸大家の先生方に手紙でお願いされ、それにこたえて、御寄贈頂いたという訳である。しかも、それは、三十六年度のことだけではなく、色紙や書簡の日付によると、四十三年のものもあり、数年にわたって継続して行われたようである。(中略)今回、この筆墨類を特に話題としたのは、この宝物を永久保存のため、その表装を、名工としてられる、市内の林茂尚氏(林装具店・大田町天神)をお願いしていたのが、最近完成したためである。

この記事から、やはり1961年の文化祭が起源であること、そしてその後も数年間「現代作家筆蹟展」が企画され、書簡・原稿類が増えていって現存の形となったことが裏付けられる。ただし1986～1988年の3回の企画展は、新たに作家に依頼をするというのではなく、保存されていた「大田高校蔵作家書簡」を利用して企画展が実施されたと考えられるのである。

さらに重要な事実として、先の『瓶陵新聞』の記事にあったように、1989年(平成元年)に表装処理がなされ、ナンバリングがなされたことが指摘できる。

2. 「大田高校蔵作家書簡」の文学的意義

「大田高校蔵作家書簡」は、いくつかの点できわめて重要な文学資料であると言える。

第1に資料そのものの重要性である。資料の共時的多様性と言い換えてもよい。これだけ多数の肉筆資料が、一堂に集められている事例はきわめて稀である。しかもそれらは、図書館や文学記念館が長い時間をかけて収集したものではなく、文化祭の展示というひとつの企画の元に、作家自らが書き送ったものであるという点でも珍しい。1961年をはじめに、その後数年間という共時的な資料であることも重要である。

第2は、個々の作家研究につながる文学的資料としての重要性である。「大田高校蔵作家書簡」の書簡や色紙は、当然のことながら全てが、これまで一度も公表されることのなかった新資料である。それだけでも重要なのであるが、本資料は個々の作家研究へとつながる大きな可

能性をも有しているのである。

たとえば、何人かの作家や詩人は、自己の作品を原稿用紙に書き記して送っているのだが、金達寿は、〈まだ発表していない、いま書きはじめている作品の書きだしです。一五〇枚くらいの予定です。〉と前置きしたうえで、小説「公僕異聞」の冒頭を記している。つまり彼は執筆中の未発表作品を送っているのである。「公僕異聞」が『現実と文学』に発表されるのは1965年5月号、単行本『公僕異聞』が東方社から刊行されるのは、1975年1月である^(注4)。これによって、「公僕異聞」が少なくとも1961年10月には制作に入っていたことが分かるのである。

あるいは、個々の作家が高校生に向けてどのようなメッセージを発信しているのか、どのような意図によって原稿や文章を送ったのかという点も興味深い。江戸川乱歩は、〈空想的経験こそは／現実の経験に比べて／さらに一層リアルである〉という文章を書き送っている。これは、乱歩が愛したイギリスの詩人・作家ウォルター・デ・ラ・メア(1873～1956)の言葉である。乱歩の代表的評論集『幻影城』(1956・5 岩谷書店)には、先の言葉を引用しつつデ・ラ・メアを紹介した一節が存在する。大田高校に送られたもの以外でも、デ・ラ・メアの言葉を書きつけた色紙が存在することは確認できる。しかしながら、乱歩の座右の銘と言えば〈うつし世は夢 夜の夢こそまこと〉という文言が有名であり、揮毫を頼まれた場合、多くはこの文言を書きしるしたのである。これはデ・ラ・メアの言葉とエドガー・アラン・ポーの言葉を基にした乱歩自身の言葉であるとされている。だが乱歩は、大田高校生に文章を依頼された時に、〈うつし世は夢～〉という定番の文言ではなく、その基となったデ・ラ・メアを選びとったのである。それはおそらく「うつし世／夜の夢」というやや抽象的な二項関係ではなく、「空想的経験／現実の経験」という明解な二項関係を示すことで、高校生達に、人間のもつ想像力の重要性を認識してもらうためであったのではないかと類推できるのである。乱歩は猟奇的作品の作家というイメージでとらえられがちである。しかし戦後の乱歩は、創作活動よりもむしろ、探偵作家協会の設立に代表されるような、探偵小説と探偵作家の地位向上に情熱を注いだ。とりわけ新人作家の発掘と育成に尽力したのである。大田高校宛乱歩書簡の日付は、昭和36年10月26日。その一週間後の11月3日に、乱歩は紫綬褒章を受章する。彼の多年にわたる探偵小説界への貢献が評価されたのである。そのような乱歩であれば、若き高校生からの依頼に熱い思いで答えようとしたことは間違いないと思われるのである。これは「大田高校蔵作家書簡」収蔵作家の一例に過ぎない。今後この資料が作家研究の一助になることは十分予想できるし、またそうなるよう願うばかりである。

3. 作家と高校生の交流

前節では、「大田高校蔵作家書簡」の価値を文学的側面から考察した。しかしながら、本資料が有する最大の意義は、高校生の依頼にきわめて真摯に向き合う作家の姿勢が顕著にうかがえることにある。地方の高校生からの突然の依頼、しかも書いたものを展示したいという依頼に対して、これだけ多くの作家が反応し、さまざまに返信したという事実は驚くべきものである。しかもどれも真摯であり、誠実であり、教育的である。

金達寿や武田繁太郎は、自らの作品を記した原稿用紙を寄せ、村野四郎や伊藤桂一らの詩人は自己の詩作品を寄せている。阿部知二は「ヨハネ伝」、駒田信二は「朝三暮四」の故事を引用する。そして佐藤春夫は〈小生所信の一端を述べて諸子の御参考とします〉という但し書きとともに〈文化とは礼節の事である。礼とは他を尊重すること、節とは自己を抑制すること。この礼節によつて、秩序ある社会生活の行はれるのが、ほんとうの文化といふものです〉と自らの「文化」論を書き送っている。作家の返信の形式・内容はきわめて多様である。しかし、いずれも高校生に対し、何をどのように語りかければよいのかが吟味されていると言えるだろう。

もちろん諸々の事情で依頼に応じられないということもあっただろう。その断りの返信も資料の中に残されている。たとえば、永六輔は〈著名人とか文化人といった言葉が嫌いですので御協力できかねます。〉と簡潔に記している。しかし理由は明解である。これを受け取った高校生は、何気なく使用していた「著名人」や「文化人」という語の意味を再考することになったに違いない。あるいは個々の考え方の多様性を実感もしたのであろう。それは、端的に断りの理由が書かれた返信がなされた事実によつてもたらされたものなのである。

志賀直哉もまた、文化祭への出展依頼に対し〈お手紙拝見しました近頃年とつて何事も億劫になりさういふ御依頼もお断りして居ります／何卒不悪／九月十六日／志賀直哉〉という断りの葉書を送ってきている。志賀直哉の言う〈何事も億劫になり〉という近況は、実は何ら誇張でも嘘でもないのである。志賀直哉は若いころから断続的に日記を記しているのだが、それは1960年(昭和35年)の「渋谷日記」を最後に書かれなくなってしまう。また創作活動も停滞気味となり、岩波書店版『志賀直哉全集 第十四巻』(1974・8)の著作年表を見るなら、1959年に発表された随筆・小説・談話類が12点であるのに比し、1961年はわずか3点にとどまっている。返信の葉書に記された9月16日の前後に書かれた書簡では、〈近頃は印刷したものでも少し長いものは見られません〉(8月28日・直井潔宛葉書)、〈その翌朝眼舞ひで右に倒れそうになつて嘔吐もあり一寸変なので中島さんといふ中央病院の先生に二日来て貰ひよく診て貰つたら、メニエール病といふ生命には心配ない病気と分り、安心しました〉(11月4日・上司海雲宛葉書)と体調の不良を記したものが散見されるのである(注5)。志賀直哉は、1961年9月時点で満78歳であり、この10年後に逝去することとなる。これらの状況を鑑みるなら、人生の再晩年を迎え体調も思わしくなかった志賀直哉が、大田高校生からの依頼の手紙に対して、わざわざ返事の葉書を書いたという事実だけで重みがあるとは言えないだろうか。

高校生が企画し、作家に依頼をする。それに対して作家たちが真摯に対応をする。それらは書簡のやりとりという「対話」であり、その過程がそっくり保存されているという意味で、「大田高校蔵作家書簡」はきわめて重要なのである。(以上、第1～3節、武田執筆)

4. 「大田高校蔵作家書簡」一覧表

以下の2つの表は「大田高校蔵作家書簡」の詳細を記した一覧表である。「一覧表1」は作家から返ってきた手紙や葉書の消印、形態の一覧である。消印の分からないものは、「不明(不記載)」とした。形態の欄について、原稿の前に*を付けたものは、特注の自家製原稿用紙が使用されていることを示す。

島根県立大田高校所蔵の作家書簡類について

「一覧表2」は実際に残された手紙の翻刻の結果を一覧表の形にまとめている。改行部分は「/」(スラッシュ)で区切っている。文章を傍線部で訂正しているもの(犬養道子)は、訂正箇所も含めて分かるように記録した。なお、判読の難しかった字は□、推測の場合は「(枯)」のように括弧書きにしている。

「一覧表1」

番号	発信者名	消印日付(記入日付)	形態(葉書・封書・色紙・原稿など)
1	阿部知二	不明(不記載)	手紙(和紙)
2	石川達三	不明(不記載)	手紙(便箋)・封筒
3	石坂洋次郎	41・7・1	手紙(便箋)・封筒
4	伊藤桂一	41・7・4	原稿(市販)・封筒
5	犬養道子	36・9・22	*原稿(犬養道子(特注))・封筒
6	永六輔	不明(不記載)	原稿(市販)
7	江戸川乱歩	36・10・2	*原稿(江戸川乱歩(特注))・封筒
8	大野晋	40・9・25	*原稿(大野晋原稿用紙)・封筒
9	亀井勝一郎	不明(不記載)	手紙(便箋)
10	金子大榮	不明(不記載)	*原稿(金子大榮(特注))
11	邱永漢	36・10・2	原稿(種字林箋)・封筒
12	金達寿	36・10・3	原稿(市販)・封筒
13	源氏鶏太	46・9・23	原稿(K.G)・封筒
14	駒田信二	36・9・12	原稿(河出書房新社原稿用紙)・封筒
15	佐藤春夫	36・9・29	*原稿(佐藤氏用箋)・封筒
16	里見弴	36・9・19	*原稿(里見弴用紙)・封筒
17	志賀直哉	36・9・17	葉書
18	獅子文六	不明(不記載)	手紙(便箋)
19	渋沢秀雄	不明(不記載)	色紙
20	鈴木大拙	36・9・29	原稿(市販)・封筒
21-1	須知徳平	不明(不記載)	原稿(紀伊國屋製)
21-2	須知徳平	不明(不記載)	原稿(紀伊國屋製)・封筒
22	瀬沼茂樹	不明(不記載)	和紙(横長)
23	曾野綾子	43・6・3	葉書
24	武田繁太郎	36・10・5	原稿(一誠堂特製)・封筒
25	田辺聖子	不明(不記載)	色紙
26	徳川夢声	不明(不記載)	手紙(便箋)
27	平岩弓枝	36・10・2	原稿(市販)・封筒
28	本多秋五	40・9・23	原稿(角川書店)・封筒
29	三宅艶子	36・10・8	原稿(神楽坂山田製)・封筒
30	村野四郎	不明(不記載)	原稿(市販)
31	村山リウ	不明(不記載)	色紙
32	山崎豊子	昭和四十三年七月三日	*原稿(山崎豊子(特注))・手紙(便箋)

33	山本周五郎	36・9・28	原稿(市販)・封筒
34-1	山本有三	36・9・12	手紙(便箋)・封筒
34-2	山本有三	36・9・22	葉書
35	和田傳	40・9・27	*原稿(和田傳(特注))・封筒
36	渡辺一夫	不明(不記載)	原稿(市販)
番外	西村滋	不明(不記載)	原稿(市販)

「一覧表2」

番号	発信者名	内容
1	阿部知二	真理を知るであろう。／そして真理はあなた／がたに自由を得させ／るであろう。／口語訳聖書ヨハネ伝より／阿部知二
2	石川達三	打ち捨てて／顧りみられぬ／枯枝やわら屑さえも／燃えれば／點し灯となりて／夜の行手を照す／達三
3	石坂洋次郎	生甲斐や／雪は山ほど／積りけり／石坂洋次郎
4	伊藤桂一	水車／伊藤桂一／ほくは ふるさとへ帰つたときに／まだ その水ぐるまをおぼえていた／けれども向うは ほくのことなど／とくに／忘れてしまっていて／ゆるり ゆるり薄のなかでまわっていた
5	犬養道子	巻頭／オランダに思う／犬養道子／第二室戸台風の過ぎたあと、和達気象庁長／官は、ある新聞で、「自然災害／が多く人口が多いところではただ単に自然に／調和して行くということでは不十分で、むしろ「人力で自然をつくつて行くということでは／いと災害は防げない」といつ書いておられた。／(すぐれた識見だと思ふ。／それにつけても考える思うのは、毎度ながらオランダの例で／ある。口土の半ばは水位より低く、七かも冬／は突風荒れ狂う水面に面して、
6	永六輔	著名人とか文化人といった言葉が嫌い／ですので御協力できかねます。／永六輔
7	江戸川乱歩	空想的経験こそは／現実の経験に比べて／さらに一層リアルである／江戸川乱歩
8	大野晋	拝復 お手紙拝見いたしました。多分私の文章が教科／書に載ってゐるのだらうと思ひます。私の文章が／尊敬する作家や学者の文章に並んで教科書に／取められてゐるといふことは本当に光栄だと思つて／ゐますが、同時に、私の精練されてゐない文章の／拙さがよく分つて、私は非常に恥かしく感じてゐ／ます。分りやすくして精しく的確な日本語が書け／るやうに、話せるやうになりたいと何時も思ひます。／私は字も下手なので嫌なのですが、その実際をお目に／かけるわけです。折角御勉強を祈ります。／早々／昭和四十年九月二十四日 大野晋
9	亀井勝一郎	美しい言葉は／深い沈黙に宿る／亀井勝一郎
10	金子大榮	圓融至徳の嘉號は、悪を轉じて／徳を成す正智 難信金剛の信樂／は疑を除き證を獲しむる真理／なり／——「教行信證」序——／悪を轉じて徳となすものでなくては正しき智／慧ではない。さればただ善悪を分別し、または善悪を否認するものは、正智とはいへぬで／あらう。／疑を除き證を獲しめるものでなくては眞実／の道理ではない。されば觀念と いい唯物と／いうも生死に迷いなく順逆に惑なからし□(ぬ)な／らば真理とはいわれぬであらう。／正智はただ念佛にあり、眞理はただ信心に／あるのである。／金子大榮記

島根県立大田高校所蔵の作家書簡類について

11	邱永漢	議論出来ないものは愚者である。／議論しないものは偏屈者である。／議論を戦わす勇氣のないものは奴隷だ。／邱永漢
12	金達寿	まだ発表していない、いま書きはじめている作品の書／きだしです。一五〇枚くらいの予定です。／公僕異聞／金達寿／私がいま住んでいるこの町に越してきて「公僕さん」こと和田次郎太に出会ったのは、／いまからちようど二年まえのことであつた。／ちようどといつても、そこにはいくらかの差／はある。一ヵ月か二ヵ月、——しかしそれを／正確にしようとするれば、私は、彼に会つたの／が二年まえの何月であつたかを、はつきりさ／せなくてはならない。／だが、私にはそれがどうも、はつきりしな／い。二月であつたか、あるいは三月であつた／か、それがよくわからないのである。道路ば／たの□かかなりのびて青くなつているのをお／ぼえているから、それは三月であつたかも知
13	源氏鶏太	好きな言葉／源氏鶏太／花には水を／人には愛を／生活にはエウモアを／また／金を失うことは小さく失うことである／名誉を失うことは大きく失うことである／勇氣を失うことはすべてを失うことである
14	駒田信二	朝三暮四／駒田信二／宋に狙公という人がいた。狙とは猿のこと／で、その名のように狙公はたくさんの猿を飼／い、家の者の食べるものをへらしてまで猿に／食わせるという猿好きであつた。狙公には猿／の心がよくわかり、猿にもまた狙公の心がわ／かったという。なにしろ多数の猿だから、そ／の食料もばかにならない。狙公はだんだん／困つてきて、猿の飼料を制限するよりほかな／くだったが、そのために、せつかく自分に馴／れている猿の機嫌をそこねてはまずいと思ひ、まず猿たちにこう言った。／「お前たちにやるとんぐりを、これからは／朝は三つ、暮は四つにしようと思うがどうだ／？」／すると猿たちは皆怒り出した。朝三つでは／腹がすいてしようがないという猿の心が狙公
15	佐藤春夫	文化とは禮節の事である。禮とは他を尊重／すること、節とは自己を抑制すること。この／禮節によつて、秩序ある社會生活の行はれる／のが、ほんとうの文化といふものです。／右 小生所信の一端を述べて諸子の御参考とします。／九月二十七日 佐藤春夫／大田高等学校学生諸子／御中
16	里見弴	為善最樂讀書便／佳／朱子語／里見弴書／訓——善ヲ為シ 樂ヲ最(集／聚ト同ジ)ルハ讀書 便 佳シ／注意——最モツトモ 最アツム
17	志賀直哉	お手紙拝見しました近頃年／とつて何事も億劫になりさうい／ふ御依頼もお断りして居ります／何卒不悪／九月十六日／志賀直哉
18	獅子文六	獅子文六
19	渋沢秀雄	思はざる／人より／電話／十三夜／渋亭
20	鈴木大拙	鈴木大拙／わしは今大分年寄て、老人仲間へはいった。／それで、ざつと過去の九十年このかたの日本語の／変遷を考へて見よと、実に今昔の感に堪えない／ものがある。昔は自分等も漢文を書いたり、作る／文章は漢文直譯で「何とせざる可けんや」とか、／「焉んぞ然ん」など、今日の若い人たちは、何の事か／もわからぬ文句ばかりを並べた。句読も切らず、節／も分けず、のべつに書きつづけた。「近時評論」と／云ふ雑誌のあつたのを覚えて居る。唐紙に刷／つてあつた由に記憶する。それから「園々珍聞」とか／云うポンチ風のもあつた。印刷のスタイルにしても、／今日に到るまで、幾多の変遷を経過したが、これ／を調べた人もあると信ずる。それから言文一致体／であるが、これも始めは、随分ごちないものやう／に覚えて居る。近來の表音主義は官製のや／うだが、古い自分等には、漢字の方が親しみ易く／又一見して読める。新聞など假名が多くて煩る／読みにくい。物のうつりかわりと云うものは面白いもの／である。

武田信明・三宅倫太郎

21-1	須知徳平	呪言／須知徳平／どこもかしこもカーキ色で／眼に映るもの総てがカーキ色で／おれの頭の中までそんな風で／明日も明後日もてんでなかった／故郷に出す便りときたら／候文で書くのが規則で／おれはそいつが苦手ときている／その上なんにも書くことがなく／むしやくしやしていたその時——／「これ おふくろに書いたんだ」／おれの隣にいたやつが／そっと見せてくれた葉書の文句／——木瓜ノ花紅ク咲キ居リ候
21-2	須知徳平	昼間の演習の時だった——／だだっ広い原っぱで／鉄砲かついで這ったり伏せたり／おれはそれだけでせい一杯だったが／やつはど□(っ)か□(て)みてたんだ／あの小っちゃな紅い花を——／おれはやつとやつのおふくろが羨しく／妙に悲しくしゃくにさわって／やつを思っきりぶん殴りたかった——／あれからのよしない年月／おれの頭の中の原っぱが／カーキ色になってくると／騙児のようにあたりをうかがい／呪言のようにこっそり眩く／——木瓜ノ花紅ク咲キ居リ候／(一九六五年三月“詩季”掲載作品)
22	瀬沼茂樹	心の／美の／燭光に／若き命を／照らし／見よ／藤村詩／瀬沼茂樹
23	曾野綾子	「日本の有名作家知識人直筆展」／御依頼の件ですが、そちらから本を／お送りくださいませ、その本へ書いて／さしあげたいと思いますので、そのよう／におとりはかりくださいませ。／曾野代理
24	武田繁太郎	自由ヶ丘夫人／武田繁太郎／一、ダンスをしましょう／このよく氣のあった六人の夫人たちのあい／だで、ダンスのお稽古をはじめましょうと／いう動議がさいしよに持ちだされたのは、週／二回の「T 御稗理学園」の講習をすませたあ／と、いつもお茶を飲みながらおしゃべりを愉／しむことにしていた喫茶店「エトアール」へ／、一行がぞろぞろと立ち寄ったときである。／初秋のよく晴れたある日の午後だった。／この「エトアール」の二段になって奥ぶか／くひろがっている店内の片側の壁は、いちめ／ん幻想的な美女の群像が乱舞していた。室内／装飾家として著名な S.M 氏の製作になるこ／の壁画は「エトアール」の呼び物の一つとし／てかなりひろく世間に知られていた。
25	田辺聖子	曾良／ゆきゆきて／たふれ伏すとも／萩の原／田辺聖子
26	徳川夢声	葱坊主／大中小の／ありにけり／徳川夢声
27	平岩弓枝	失敗してもいい／ころんでもいい／若い時は。／後悔さえ、しなければ／起きて行く勇気を／忘れなければ／平岩弓枝／昭和三十六年九月三十日
28	本多秋五	拝復／私は字が下手なので、原稿も用ズミ後は返して／もらっています。直筆展は御容赦を願います。／勿々／六五・九・二二／本多秋五／島根縣立大田高等学校／小山美恵様
29	三宅艶子	たとえ明日が／世の終りでも／私は／今日／りんごの木を植える／私の好きな言葉です／三宅艶子
30	村野四郎	歌／村野四郎／うすむらさきの／ボンネをかたむけ／道のむこうに立っている／夏もおわりの／山莊夫人／野あざみの花
31	村山リウ	やわ良かく／美しく／ゆるやかに／村山リウ
32	山崎豊子	(一枚目) 努力する限り／人間は迷うであろう／——私の好きな言葉——／昭和四十三年七月三日／山崎豊子 (二枚目) 前略／先日、ご鄭重なご依頼状／をお受け取り致しました。／ご希望の本人直筆の／「ことば」を同封致します。／文化祭でのご成功を、心から／お祈り申し上げます。／早々／七月三日／山崎豊子内／大岡幸恵様

島根県立大田高校所蔵の作家書簡類について

33	山本周五郎	前略。／せっかくのお申付けですが、私は／かういふことはすべてお断わりす／ることにしてをりますので、失禮なが／ら御勘弁ねがひます。 早々／山本周五郎
34-1	山本有三	御芳書たしかに御受いたしました／せっかくのお言葉でございますがこのところ山本／病気療養中にてお役に立ちかね深くおわび／申し上げます／右あしからずおほしめし下さいませ。／記念の御催しの御成功を心から祈っております／九月十二日／河上吉美様／山本内
34-2	山本有三	御丁寧なお見舞いのお手かみいた々き恐縮いた／しました。皆さまのような人情の厚い方々がおら／れる事の余りに嬉しくちょっと御礼のハガキ書きました／お導きの先生方のお心の奥ゆかしさ／がしみじみ忍ばれ、今の方々にもこんな／よい方々があるのかと日本の前途に対し久々に／明かるい心地がいたしました 深く深く感謝申し／上げます。御案じ下さいました 山本は十分快方に／向かっておりますから御放念下さいませ／重ねて皆さまの御健祥と御成功をいのり上げます
35	和田傳	扇風機／和田傳／扇風機の季節になったが、私が愛用してい／る扇風機は五十年の使用に堪えてなお矍鑠と／して健在である。大正のはじめごろ、当時の／「東京電灯」（いまの東電）の営業所が押し／りにきて、父が無理矢理に買われたもので、黒塗りの鉄製のまるで鎧のような感じのしろも／のである。いまの東芝の前身「芝浦／電気」の製品で、そいつを東電が押し／りに／きたのはよほど電力があまっていたからにち／がない。／そのとき東電が押し／りに成功したのはむ／らでは私の家だけだったらしく、むらの□(そ)と
36	渡辺一夫	小生は智識人文化人などいふ立／派な人間ではございませぬ、判ら／ぬことばかり多く、自信をお持ち／の方を羨むばかりです。死の床／に横たはった時、何か判るやうに／なればよい、たとへ、それが死に／ゆく人間のあきらめであつてもと／思つてゐます。／渡辺一夫
番外	西村滋	本のすすめ／本の中には、あなたとはちがう人生があ／る。あなたとはちがった人間がいる。あなた／とはちがった思考が、感覚がある／つまり読書とは／あなたが、あなた以外の人間を生きること／なのだ。／あなたというひとは、たったひとりきりな／のだけれど、たくさんの人を生きることなの／だ。／強い人、弱い人、心ひろい人、せまい人、／いろいろの人を生きることだ。そして、そ／れを包むことのできる心の養うことなのだ。／たくさんの本の中に入ってゆく人は、たく／さんのみやげをかかえて出てくるのだ。その／みやげとは、カロリーだ。／心のカロリーだ／たくさんの人を生きよう。そして、心をに／ぎやかにしよう。それのできる人に、心の貧／しさはない。孤独もない。

(第4節、三宅執筆)

(注1)年月日から考えて『文芸年鑑・昭和36年版』（新潮社 1961・6）を参照したと推定できる。なお1961年「現代作家筆蹟展」23名の住所のほとんどがそこで確認できる。

(注2)『創立四十周年記念録』（島根県立大田高等学校四十周年記念録編集委員会 1961・11）

(注3)「山本裕義」と記されているが該当作家は不明である。おそらく「山本祐義」の誤記であろうと判断できる。「山本祐義・やまもとすけよし」（1939～）は、『まあちゃん・こんにちは』（1960・12 文芸春秋社）の著者。アメリカ留学を書いたエッセイである本書はベストセラーとなった。

(注4)『金達寿小説全集 三』（筑摩書房 1980・10）

(注5)『志賀直哉全集 第十三巻』（岩波書店 1974・7）

武田信明・三宅倫太郎

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(2019～2021年度、代表・田中則雄)による研究成果の一部である。